

## 二〇一八年度 入学試験問題

経済学部A方式Ⅱ日程・社会学部A方式Ⅱ日程・スポーツ健康学部A方式

## 二限 国 語 (60分)

## 〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。
- 四 問題冊子のページを切り離さないこと。

## マークシート解答方法についての注意

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

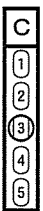
(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。



○でかこまないこと。

二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

初っ端から物騒な話をしてみたい。筆者がここで最初に言いたいことは、社会保障という仕組みは「自分で自分の首を絞める」という困った性格を持っている、ということである。こんな極端なことを言い出す人間は、あまりいい人だろう。社会保障の教科書や解説書にも出てこないはずである。

筆者はこれまで社会保障を経済学の立場から勉強してきたが、経済学者が社会保障の問題を扱うと、風当たりがよくない。「経済学者が社会保障の話をする、お金のことをすぐ持ち出す」「福祉の分野に競争原理を持ち込むのは筋違いだ」等々。読者の中にも、そのような印象をお持ちの方が多いいはずである。

経済学は、限られた資源をいかに効率よく活用するか、という発想をするから、財源や市場メカニズムの話を見ても無視できない。本当は、経済学は効率性という評価軸だけでなく、人々にとって公平な社会をいかに実現すべきかという、公平性というもう一つの評価軸を持っている。しかし、社会科学の分野で効率性をきちんと議論するのは経済学ぐらいだから、経済学はどうしても目立ち、風当たりが強くなる。

資源や財源など制約条件を考えて得られた答えのほうが、考えなくて得られた答えに比べて、人々の満足度を低くするのは当然である。経済学者による政策提言がつねに否定的に受け止められるのも、そのためである。資源制約を念頭に置かないで得られた満足度は、そもそも維持できない性格のもののだが、多くの人はそこまで考えない。

そして、まさしくその経済学的な発想に基づいて考えると、社会保障という制度には重大な問題があることに気づく。社会保障を専門に研究している人たちから見れば、「社会保障のことを分かっている経済学者が、またいい加減なことを言う」ということになるかもしれないが、少し我慢して筆者の話にお付き合い願いたい。

① そもそも、社会保障はなぜ存在するのだろうか。常識的に考えれば、社会保障は、疾病や失業、老後における稼働能力の低下など、人間が社会で直面するさまざまなリスクに備えるために作り上げてきた仕組みといちおう位置づけることができる。

しかし、社会保障は昔からずっと存在したわけではない。社会が産業化するまでは、リスク分散機能を担ってきたのは家族や地域社会である。病気や高齢になれば、ともに過ごす家族が扶養し、それで不十分なら地域社会が助けるといふ形をとっていた。社会における生産活動の単位が家族や地域社会だったとすれば、リスク分散の単位もそれに対応したものになるのは自然な姿だったと言える。

しかし、社会の産業化が次第に進んでいくと、生産活動の単位が個人に移っていき、個人や家族や地域社会から切り離す力が働くことになる。それと同時に、個人の経済的な自立性が高まる。それに伴って、家族や地域社会がこれまで担って来たりリスク分散機能を次第に社会全体が担うようになる。医療保険や公的年金、雇用保険など、職域単位、地域単位で自然発生的に登場した社会保障の仕組みが、政府(国)によって次第に調整・統括されていくわけである。

ただし、社会の中で発生するさまざまなリスクは、すべての年齢階層において一様に発生するものではない。なかでも、疾病リスクや稼働能力の低下リスクに晒される度合いは、高齢になるほど高まる。なかには、予想より長生きして生活費が足りなくなるといふ、「長生きのリスク」に直面する人も出てくる。このように、実現する確率が年齢間で偏在するリスクに社会保障という仕組みで備えようとすると、結果的に、現役層が保険料や税の形で財源を負担するという姿が生まれる。そのため、社会保障にはその性格上、現役層から高齢層への所得移転がどうしても伴うことになる。② 社会保障は単純なリスク分散のための装置としては捉えきれなくなる。

社会保障がどうしても現役層から高齢層へという世代間の所得移転を伴うとすれば、その充実は少し厄介な結果を生むことになる。確かに、老後の不安が軽減されることは私たちにとってとてもありがたいことである。社会保障はしばしば、「A」と表現される。社会保障が充実する前は、老後は子供の世話になる必要があった。しかし、これからはその必要はない。子供が生まれなかったり、子供に見捨てられたりした親、あるいは結婚しなかった人にとっても、社会保障という制度のおかげで安心して老後を過ごせるようになる。

しかし、よい話だけではない。この社会保障のメリットこそが、社会保障にとつての命取りとなる。というのは、つぎのよ

うな理由による。自分の子供に老後の世話を頼む必要がなくなれば、私たちは子供を養育する必要をそれだけ感じなくなる。お金も手間もかかる子供を多く産み育てるのは割に合わないと考える人も増えてくるだろう。逆に、年老いた親を持つ子供も、公的年金や介護保険という仕組みがあり、医療や公的保険でカバーされるのだから、自分の親の面倒を見ることはできれば避けたいと思うようになる。このように、Aとしての社会保障が充実すればするほど、子供に対する親の需要が弱まり、親の面倒を見ることに対する子供の義務感も同時に弱まる。社会保障は人々の気持ちや行動を変化させる。

ア、社会保障が制度として維持されるためには、社会全体で子供が順調に再生産されることが重要な前提条件となっている。高齢者に対する給付を維持するためには、その財源を賄う現役層がいなければならぬ。しかし、社会保障の充実に伴って、子供に対する需要が減少し、子供数が実際に減少していくとすればどうなるか。社会保障がよって立つ財政的な基盤が徐々に揺らぐことになる。しかも、その少なくなった子供が親の面倒を見る義務感を持たないようにになると、公的な社会保障の補完を期待できなくなる。仮に子供が親孝行であったとしても、きょうだいが多い時代に比べると両親扶養の負担はかなり重くなるだろう。

社会保障は、人口が順調に再生産されれば何の問題も生まず、人々の幸せに資する素晴らしい仕組みとして機能する。しかし、社会保障は人口を減少させる効果を持っている。それは、子供に財源を期待している社会保障にとって致命的である。その意味で、社会保障は、自分で自分の首を絞めるという性質を内包しているのである。

ここで、戦後日本の状況を見ておこう。一九五〇年代以降における社会保障給付費の国内総生産(GDP)に対する比率と合計特殊出生率の推移を見ると、社会保障の充実と出生率の低下は同時進行している。もちろん、ここから、社会保障の充実↓出生率の低下、という因果関係があると単純に結論づけるつもりはない。生産性の向上による所得水準の向上で老後への備えもでき、子供の世話になる必要がなくなった、という人も増えてきているはずだからである。

しかし、社会保障が充実しているのに、その財源を支えるべき子供たちが順調に再生産されないとすれば、社会保障がうまく機能しなくなる。社会保障が自分で自分の首を絞める性格を持つという話は、けっこう現実的な性格を持っている。人口が

順調に再生産されれば、現行の社会保障には基本的に大きな問題はない。しかし、人口の順調な再生産というのは、制度の持続性にとってかなりきつい前提条件である。それをどこまで明確に認識するかで、社会保障に対する見方は大きく異なってくる。

経済学的に言えば、社会保障の持続可能性を高めるためには、二つの方法が考えられる。一つ目は、子育て支援を充実することである。子供は、保険料や税を負担することを通じて、自分だけでなく社会の大人たちの老後の面倒を見るという役割を果たしている。これを子供の「外部経済効果」と呼ぶ。しかし、私たちは子供の外部経済効果を念頭に置いてどれだけ子供を産み育てるかという意思決定をしない。あくまでも、夫婦にとって最適な子供数を決めるだけである。したがって、実際に社会全体で生まれてくる子供の数は、子供の外部経済効果を考慮しない分だけ、社会的に最適な水準を必ず下回ることになる。

この状態を改めるためには、子供を産み育てている者に補助金を与えるなど、経済的な支援をして子供数を社会的に最適な数に近づけることが望まれる。この経済的な支援が子育て支援と呼ばれるものである。公的年金との関連に限って言えば、子供は大人になってから年金の保険料負担をするが、その保険料負担だけ世の中に外部経済効果を与えているわけである（負担した保険料のうち自分の親の年金に回る分もあるが、その分は無視できるほど微少なので、負担した保険料はすべて世の中の親の年金に回っているとみなしてよい）。その点を考えると、年金保険料に相当する分は子育て支援に回しても構わないことになる。

このように、<sup>③</sup>子育て支援は子供の外部経済効果を「内部化」する仕組みとして位置づけられるが、こうしたタイプの政策を経済学的には「セカンド・ベスト」(次善)の策と呼ぶ。社会保障は人々に対して、それがなかった場合に比べて子供数を減らすという効果を及ぼす。その意味で、社会保障は人々の行動に歪みゆがみをかけている。それが問題というのなら、社会保障という仕組みを改めればよいのだが、イ 社会保障以外のところで人々の行動に違う形の歪みをかけ、全体として望ましい方向を目指す、というのがセカンド・ベストの発想である。子育て支援は人々に子供を増やす誘因を与え、人々の行動に歪みをかけている政策だが、それによって子供数が回復すれば、社会保障の持続可能性は高まることになる。

問題は、この子育て支援がしっかりとした効果を生むかである。

ウ

、子育て支援が充実している国ほど出生率が高くなる傾向がある。しかし、子供数が多いから子育て支援の規模が結果的に大きくなるという逆の因果関係がそこに反映されている面もある。因果関係をどう抽出するかは、いつも研究者を悩ませる問題である。さらに、子育て支援によって仮に少子化が回復するとしても、社会保障財政にプラスの影響が出てくるまでにはやはり相当の年数を要することになる。筆者は、子育て支援に効果を過度に期待するのはよくないと思っている。

社会保障の持続可能性を高めるもう一つの方法は、社会保障の仕組みそのものにつけることである。これは、経済学的には、「ファースト・ベスト」と呼ばれるタイプの政策である。社会保障があるからこそ、老後を子供に頼る気持ちが弱まり、子供数が減少するのだから、社会保障の規模を縮小することによって、制度を結果的に頑健なものにすることができる。社会保障の規模縮小のメニューとしては、給付水準を引き下げたり、給付対象を限定したりすることが考えられる。

しかし、この政策を実行に移すことはかなり難しい。高齢者は、社会保障給付の削減にすぐには賛成しないからである。「自分たちは若い頃に保険料や税の形で、社会保障の財源を負担してきた。いまさら、給付を削るとは何事か」と彼らが反発するのは目に見えているし、そうした反論を「あなたの考えは間違いです」と一蹴することもできないだろう。エ、人口

減少が進むと高齢層の人口比率が高まるので、彼らの経済的利益を阻害するような改革は

B

に受け入れられない。

社会保障の規模縮小がなかなか進まない、どのような事態になるだろうか。高齢層向けの給付水準を維持するためには、現役層の負担を引き上げるしかない。そうすると、現役層の経済的な体力が更に弱まってしまし、負担の引き上げもまた政治的な抵抗を受ける。負担の引き上げを現役層が受け入れなければ、つぎの世代にその負担を先送りするしか方法はない。しかし、人口減少が進むと、付け回された負担は次第に支払いきれなくなり、社会保障はやはりどこかの時点で維持できなくなる。人口減少の圧力から、私たちはなかなか逃れられないのである。

(小塩隆士『18歳からの社会保障読本―不安のなかの幸せをさがして―』より。ただし原文の一部を変更した。)

注1 合計特殊出生率

女性が生涯にわたって産む平均的な子供数のこと。

問一 本文中の空欄

ア

イ

エ

に入る言葉として最も適切なものを、つぎの各群の1～5の中からそれぞれ一つ

選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- |   |   |      |   |     |   |      |   |      |   |       |
|---|---|------|---|-----|---|------|---|------|---|-------|
| ア | 1 | さすがに | 2 | だから | 3 | ところが | 4 | とりわけ | 5 | なかんずく |
| イ | 1 | いつも  | 2 | 更に  | 3 | だが   | 4 | 翻って  | 5 | むしろ   |
| ウ | 1 | しかし  | 2 | だから | 3 | 確かに  | 4 | つまり  | 5 | とはいえ  |
| エ | 1 | そもそも | 2 | だが  | 3 | とはいえ | 4 | それでも | 5 | ゆえに   |

問二 傍線部①の「そもそも、社会保障はなぜ存在するのだろうか」に対する解答としてふさわしくなるように、つぎの説明文

の空欄

あ

い

う

にあてはまる語を文の後の1～12から選び、その番号を解答欄にマークせよ。

人々がリスクに直面した際に、かつては家族や地域社会で行われて来た **あ** が、 **い** に伴ってそれらから切り離されてしまったために、代わりに **う** が担わざるを得なくなったから。

- |   |    |   |      |   |      |    |      |    |     |    |     |
|---|----|---|------|---|------|----|------|----|-----|----|-----|
| 1 | 育児 | 2 | 儀礼   | 3 | 景気後退 | 4  | 経済発展 | 5  | 現役層 | 6  | 高齢化 |
| 7 | 社会 | 8 | 助け合い | 9 | 地方   | 10 | 都市部  | 11 | 保養  | 12 | 予防  |

問三 傍線部②に「社会保障は単純なリスク分散のための装置としては捉えきれなくなる」とあるが、それはなぜか。その理由としてあてはまらないものをつぎの1～5の中から、二つを選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 疾病や稼得能力の低下が特定の年齢階層で多く起こる傾向があるから。
- 2 現役層ばかりが社会保障の財源を負担することになるから。
- 3 社会保障は、リスクを幅広い年齢層に分散させたいから。
- 4 社会保障は、疾病や稼得能力の低下に対処しなければならず複雑な装置とならざるをえないから。
- 5 社会保障は、特定の年齢階層内での所得移転に過ぎないから。

問四 本文中の空欄

A

に入る言葉として最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つを選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 親孝行の社会化
- 2 子育ての保険化
- 3 社会の産業化
- 4 リスクの分散化
- 5 老後の安心化



問五 傍線部③の「子育て支援は子供の外部経済効果を「内部化」する仕組みとして位置づけられる」とはどういうことか。その説明としてふさわしいものをつぎの1〜5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 子育て支援は、社会保障の持続可能性にとって必要以上の子供数にしてしまう方策であるということ。  
2 子育て支援は、夫婦に対して、将来の保険料や税の負担者としての子供の数を増やすように誘導する仕組みであるということ。

3 子育て支援は、社会保障以外の事柄と見なされることが多いので、社会保障の中心に据える装置が必要であるということ。

4 子育て支援は、夫婦が夫婦にとっての最適な子供数を決められるようにする経済的支援であるということ。

5 子育て支援は、子供を持つことに対する需要を弱め、社会にとって望ましい子供数を減らしてしまいかねないものであるということ。

問六 傍線部④に「筆者は、子育て支援に効果を過度に期待するのはよくないと思っている」とあるが、なぜ子育て支援の効果に過度に期待すべきでないのか、その理由としてふさわしいものをつぎの1〜6の中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

1 子育て支援が充実している国で、出生率が高いとは限らないから。

2 子育て支援の拡充が出生率を高めるかどうかはわからないから。

3 子供を何人持つかは夫婦が決定することで、政策は介入しにくいことだから。

4 子育て支援策によって増えた子供が社会保障財政の担い手になるのはかなり先のことだから。

5 子育て支援策は、社会保障の仕組みそのものは変えない次善の策に過ぎないから。

6 子育て支援策は、社会保障以外のところで人々の行動に歪みをかけているから。

問七 本文中の空欄

B

に入る言葉として最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマ

ークせよ。

- 1 財政的
- 2 心理的
- 3 政治的
- 4 利己的
- 5 倫理的

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

柳宗理のデザインした日用品が静かに注目されている。たとえば薬缶<sup>やかん</sup>。何の変哲もない普通の薬缶である。しかし実に堂々として、薬缶はやつぱりこれに限る、と思わせる説得力に満ちている。

薬缶の用途は単純だ。水道の蛇口から水を注ぎ入れて加熱器にかける。ガスでも電磁調理器でも同じことだ。湯が沸くと、注ぎ口から湯気が立ち上り、それを急須や保温ポットに移す。柳宗理の薬缶は、そんな A として、素晴らしくよくできている。把手の握り心地やたっぷりした注ぎ口の造形はいい意味で鈍みがあり、安心感がある。ずんぐりと座りのいい胴や蓋の膨らみには、用の美に徹した設計者の誠意が漲<sup>みな</sup>っているようだ。少し前まではイタリア製の、幾何学的にエッジの立ったケトルがなにやら目を奪い、時代の先端を切り裂いて進んでいるかのように感じられたものだ。しかし最近ではむしろそういうものの方が時代がかって見える。

この感覚は決して懐古趣味の流行やリバイバル・ブームではない。消費の欲求に駆られて、目を三角にして「新しさ」を追い求めていた僕らのアタマが、少し平熱にもどって、まともに日常の周囲を見渡すゆとりができたということではないだろうか。柳宗理の薬缶はアンティークでもないし、古き良き時代を象徴するノスタルジの産物でもない。ごく普通の工業製品として、日常の動作にきれいに寄り添っているということだ。

柳宗理のアトリエを一度だけ訪ねたことがあるが、そこには石膏<sup>せっこう</sup>で作ったプロダクツの模型がたくさん並んでいた。それはコンピュータによる形態シミュレーションなど用いないで、ひたすら原寸で石膏模型を作り、それをひたすら手で撫<sup>な</sup>でさすつて何度も修正を加え、用途になじむ形を追求した痕跡そのものであり、その丁寧な姿勢とぶれない信念に、頭が下がる思いがした。そういうものが再び市場で支持されはじめているというのは、喜ばしい兆候である。

① デザインとはスタイリングではない。ものの形を計画的・意識的に作る行為は確かにデザインだが、それだけではない。デ

ザインとは生み出すだけの思想ではなく、ものを介して暮らしや環境の本質を考える生活の思想でもある。したがって、作ると同様に、気付くということのなかにもデザインの本意がある。

僕らの身の周りにあるものはすべてデザインされている。コップも、蛍光灯も、ボールペンも、携帯電話も、床材のユニットも、シャワーヘッドの穴の配列も、インスタントラーメンの麺の縮れ具合も、計画されて作られているという意味ではすべてがデザインされていると言っていいたい。人間が生きて環境をなす。そこに織り込まれた膨大な知恵の堆積のひとつひとつに覚醒していくプロセスにデザインの醍醐味<sup>だいごみ</sup>がある。普段は意識されない環境のなかに、それを意識する糸口が見つかっただけで、世界は新鮮に見えてくる。

人間は、世界を四角くデザインしてきた。有機的な大地を四角く区画し、四角い街路を設けて、そこに四角いビルを無数に建ててきた。四角い自動ドアからビルに入り、四角いエレベーターに乗って昇降する。四角い廊下を直角に曲がって、四角いドアをあけると四角い部屋が現れる。そこには四角い家具、四角い窓が配されている。テーブルもキャビネットもテレビも、それを操作するリモコンも四角い。四角いデスクの上で四角いパソコンの四角いキーを打ち、四角い便箋に文字を出力する。その便箋を入れる封筒も四角く、そこに貼る切手も四角い。そこに押される消印は時に丸いけれども。

なぜ人類は環境を四角くデザインしたのだろうか。見渡してみると、自然のなかには四角はほとんどない。四という数理が自然のなかにはないはずだが、四角は非常に不安定なので、具体的に発現することが少ないようだ。ごくまれに、完璧な立方体の鉱物の結晶などを見ることがあるが、この造化の妙はむしろ人工的に見える。

おそらくは、直線と直角の発見、そしてその応用が、四角い形をこれほど多様に人間にもたらした原因だと思われる。直線や直角は、二本の手を用いれば、比較的簡単に具体化することができる。たとえばバナナのような大きな葉を二つに折ると、その折れ筋は直線になる。その折れ筋をそろえるようにもう一回折ると、直角が得られるのである。その延長に四角がある。つまり四角とは、人間にとって、手をのばせばそこにある最も身近な最適性能あるは幾何学原理だったのである。だから最先端のパソコンも携帯も、そのフォームは古典的なのだ。

円もまた、人間が好きな形の一つである。古代神具の鏡も、貨幣も、ボタンも、マンホールの蓋も、茶碗もCDも正円である。初期の石器の中央に正円が完璧にくり抜かれているのを見て驚いたことがあるが、硬い石をドリルのように回転させて、より柔らかい石をくり抜くと、ほぼ完璧な正円の穴を得ることができる。これもまた、回転という運動に即応して人の二本の手が、頭脳による推理や演繹たんえきより先に、正円を探り当てていたかもしれない。いずれにしても、簡潔な幾何学形態は、人間と世界の関係のなかに **B** の集積を築いていく基本となつている。人間は、四角に導かれて環境を四角くデザインしてきた。そしてそれに劣らず円形にも触発されて、日用品に少なからず円を適用してきたのである。

マンホールの蓋は、四角ではなく丸である。もしマンホールの蓋が、四角だったら、蓋はマンホールの穴のなかに落ちてしまふ。だから、マンホールの蓋は丸くなくてはいけない。同じ意味で紙は四角くなくてはならない。丸いと無駄が発生する。紙は縦横のプロポーションが1対 $\sqrt{2}$ の比率に設定されていて、何度折つても縦と横の比率は同じになるように意図されている。

鉛筆の断面は六角形であるが、これにも勿論理由がある。断面が丸いと、鉛筆は机の上を転がりやすく、机の上から床に落下しやすい。硬い床に落下すると、柔らかい炭素の芯は簡単に折れてしまう。この不都合を避けるなら、おのずと鉛筆の断面は転がりにくい形を模索することになる。しかし転がりにくいからといって、断面が三角や四角だと持った時に指が痛い。したがって、転がりにくく程よい握り心地で、左右対称で生産性のいい六角形に落ちついたという次第である。

④ **ボールは丸い。** 野球のボールもテニスのボールもサッカーボールも丸い。ボールが丸い理由くらいすぐ分かると思われるかもしれないが、最初から丸いボールがあつたわけではない。精度の高い球体を作る技術は、石器に丸い穴をあけるのとはわけが違う。だから初期のボールは精度の高い球体ではなく、比較的丸いという程度のものであったはずだ。しかし比較的丸いという程度のボールでは球技は楽しめない。スポーツ人類学の専門家によると、近代科学の発達と球技の発達は並行して進んできたという。つまり球体の運動は物理法則の明快な表象であり、人間は、知るに至った自然の秩序や法則を、球体運動のコント

ルール、つまり球技をすることで再確認してきたというわけである。それを行うには完全な球体に近いボールが必要であり、それを生み出す技術精度が向上にしたがって、球技の技能も高度化してきたというわけである。

ボールが丸くないと、球技の上達は起こりえない。同じ動作に対するボールのリアクションが一定でないとテニスもサッカーも上達は望めない。それが一定であるなら、訓練によって球技の上達は着実に起こり、ピッチャーはフォークボールを投げられるようになり、曲芸師は大玉の上に載って歩くことができるようになる。

球と球技の関係は、ものと暮らしの関係にも移行させて考えることができる。柳宗理の葉缶もそのひとつだが、よくできたデザインは精度のいいボールのようなものである。精度の高いボールが宇宙の原理を表象するように、優れたデザインは人の行為の普遍性を表象している。デザインが単なるスタイリングではないと言われるゆえんは、球が丸くないと球技が上達しないと同様、デザインが人の行為の本質に寄り添っていないと、暮らしも文化も熟成していかないからである。これを悟ったデザイナーたちは、精巧な球を作るように、かたちを見出そうと努力するようになる。住居を住むための機械と評した建築家のル・コルビュジエも、イタリアをデザイン王国に導くことに寄与したプロダクトデザイナー、アツキレ・カステリオーニも、ドイツの工業デザインの知的な極まりをひととき世に知らしめたデザイナー・ラムスも、日本の柳宗理も、めざしたものは同じ、暮らしを啓発する、もののかたちの探求である。

柳宗理の父、柳宗悦は日本の民芸運動の創始者であった。民芸<sup>⑤</sup>とは、用具のかたちの根柢を長い暮らしの積み重ねのなかにも求める考え方である。石灰質を含んだ水滴の、遠大なるしたたかりの堆積が鍾乳洞を生むように、暮らしの営みの反復がかたちを育む。川の水流に運ばれ研磨されてきた石ころのように、人の用が暮らしの道具にかたちの必然をもたらすという着想である。その視点には深く共感できる。

しかし、水流に身を任せて何百年も僕らは待つわけにはいかない。技術革命は速度と変化を同時に突きつけてくる。そこに必要なものは理性と合理性をたずさえて自分たちが生きる未来環境を計画していく意志だ。つまり、こころざしを持ってかた

ちをつくり環境をなすこと。近代社会の成立とともに人々はそのような着想を生み出した。それがデザインである。それは富の蓄積へと繋がる発想ではない。経済の勃興をめぐりただでは得られない豊かさをつくること。この着想を、僕らは何度でもかみしめ直せばいい。

今日、僕らはボールを丸くつくり得ているだろうか。ずんぐりと鈍い柳宗理の薬缶を見ながら、そんな思いを反芻している。

(原研哉『日本のデザイン—美意識がつくる未来』より。ただし原文の一部を変更した。)

問一 本文中の空欄

A

B

に入る言葉として最も適切なものを、つぎの各群の1～5の中からそれぞれ一つ

選び、その番号を解答欄にマークせよ。

A 1 日常の光景にごく当たり前に溶け込む道具

2 日常の反復をいつまでも支えてくれる道具

3 日常の習慣を新鮮な経験に変えてくれる道具

4 日常の行為を無理なく自然に行うための道具

5 日常の価値をあらためてかみしめるための道具

B 1 論理性に依拠した思考

2 規則性を追求した運動

3 身体性に即応した経験

4 偶然性を排除した形態

5 合理性に立脚した知恵

問二 傍線部①に「デザインとはスタイリングではない」とあるが、それはなぜか。筆者の考えとして最も適切なものをつぎの

1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 スタイリングとしてのデザインは「新しさ」を求める人々の欲求に応えるものだったが、そうした消費への欲求そのものが時代遅れになっているから。

2 デザインは人の行為の本質に寄り添うことで暮らしや文化を熟成させていくべきものだが、それはスタイリングだけで達成できることではないから。

3 デザインは暮らしや環境の本質を考える生活の思想でもあるが、それ自体の美を求めるスタイリングは暮らしや環境との調和を考慮しないから。

4 ものの形を計画的・意識的に作る行為であるスタイリングは、長い暮らしの積み重ねのなかで自然に育まれるもののかたちと矛盾してしまうから。

5 スタイリングとしてのデザインは近代社会の成立とともに生まれた富の蓄積へ繋がる発想であり、より根源的な自然の秩序や法則に従うものではないから。

問三 傍線部②に「気付くということ」とあるが、何に「気付く」ことか。その説明として最も適切なものをつぎの1～5の中か

ら一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 あるゆるものがデザインされているという事実気付くこと

2 ものの形の背後に隠された意図があることに気付くこと

3 デザインされたものに織り込まれた膨大な知恵の堆積に気付くこと

4 暮らしや環境の本質にとって何が大切であるかに気付くこと

5 普段意識されない環境のなかにある新たなデザインに気付くこと



問四 傍線部③「手をのばせばそこにある」とはどのような意味か。その説明として最も適切なものをつぎの1〜5の中から1つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 人間が生きる自然のなかに数多く存在しているということ
- 2 多様に応用され人間の生活の多くの場面を構成しているということ
- 3 人が手を動かすことによって簡単に具体化できるということ
- 4 身近な最適性能であるがゆえに誰にでも模倣できるということ
- 5 葉の折れ筋から最新技術まであらゆる人工物に見られるということ

問五 傍線部④「ボールは丸い」とあるが、筆者はなぜ「ボール」の例を出しているのだろうか。その説明として最も適切なものをつぎの1〜5の中から1つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 単純な幾何学形態に関する議論がより高度なデザインにも当てはまることを示すために、ボールの精度と近代科学の発達の関係を例にとっている。
- 2 もののデザインの優劣によって人間の技能や生活の質が大きく左右されることを示すために、ボールの精度と球技の上達の関係を例にとっている。
- 3 デザインが実生活の必要を満たすだけでなく人間の遊戯的な活動の洗練を促すものでもあることを示すために、ボールの精度と球技の発展の関係を例にとっている。
- 4 優れたデザインにはそれを必然的なものとする理由が常に存在することを示すために、ボールの精度と物理法則の表象の関係を例にとっている。
- 5 生活文化の洗練のためには常に一定のリアクションを返すデザインが必要であることを示すために、ボールの精度と球技の訓練の関係を例にとっている。

問六 傍線部⑤「民芸」に対する筆者の評価として最も適切なものを、つぎの1〜5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 今日のデザインは技術革命による変化と速度への対応を求められているので、民芸の視点にただ共感するだけではなく、民芸と近代デザインの融合が試されてよい。
- 2 今日のデザインが取り組むべき課題は経済的価値に還元できない豊かさを作ることであり、そのためには民芸の視点に何度でも立ち返る必要がある。

3 今日のデザインが百年単位の時間の流れを待つことはできないので、民芸の視点には深く共感するものの、それが今日のデザインにとって障害になることもある。

4 今日のデザインは柳宗理の業缶に見られるように人の用に再び目を向けつつあり、民芸の視点への共感の広がりはそのうした潮流の思想的な根拠になりうる。

5 今日のデザインは人の用がくらしの道具にかたちの必然をもたらすという民芸の着想に学びつつも、より積極的に自らの環境を作り出す意志をもたねばならない。

問七 傍線部⑥「僕らはボールを丸くつくり得ているだろうか」という問いかけの言い換えとして適切なものをつぎの1〜5の中から二つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 私たちが作り出したものは人の行為の普遍性を表象しえているだろうか。
- 2 私たちが作り出したものは暮らしの積み重ねに根拠づけられているだろうか。
- 3 私たちが作り出したものは宇宙の原理を表象する精度をもちえているだろうか。
- 4 私たちが作り出したものは市場に支持されるものになりえているだろうか。
- 5 私たちが作り出したものは暮らしを啓発するものになりえているだろうか。

(三) つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

小説へのシヨウ動がはじめて自分に抑え難いものとなった時、というのは、評論では折り合いのつかない何かに表現を迫られた時のことなのだが、その時分を振り返ってみると、私自身、それまで書き継いでいた評論という形式に失望していたのではなかった。小説よりも先に評論を発表していたのは私の自然で、評論と小説は血縁であつてもやはり別のものとしか思われなかつた。従つて、あなたは評論家になるつもりなのか、それとも小説家になるつもりなのかという少々意地の悪い当時の質問にも深くは考え込まず、自分の自然が解決するだろうと思つていた。

しかし、実際に小説を書き始めてまず突き当たつた壁は、評論という形式に馴染んだための、事物の抽象的な処理、非具体的な処理であつた。心を動かされた作品と対い合ひ、なぜ感動したのかを問うてみる。事を あ しながら一般化できる共通項を抜き出し、敷衍してゆく作業は、当然のこととして、言葉による明確な結論を自分に要求する。時によつては、結論としての言葉あるいは文章が先に立ち、それを客観的に証明しようとして論理的な作業をひたすら重ねてゆく。

感動のヨリ所を い して、少しでも論理的に把握したい評論への欲望と、感動のヨリ所を う して、更に強調したい小説への欲望、この二種類の欲望は、どうやら自分の中には矛盾なく生きてゐるらしい。今更言い立てるのも気がひけるようなことながら、小説で必要なのは事物の具体的な表現であつて、抽象的な論評でもなければ概念的な記述でもない。なぜこの作品を書いたかという、作者の直接の言葉は不要であり、結論は、作者が提示した具体的な事物を通じて読者にゆだねればよい。しかし習慣は恐ろしい。結論めいた文章を書かない不安と私は長く争うことになる。

小説を書くこうとしながら、評論では許される抽象的、概念的な物言いに無意識のうちに逃れている自分に気づくと、一時的にもせよ筆は止つてしまふ。 え のために必要な事物の具体的な表現といつても、背後で統一するのは理性なので、感受性の単なる羅列というわけにはゆかず、具体的な事物の小さな一つ一つといえども理性の関る秩序の外には放り出せないが、自然の勢いで書き進めるものが具体的にならないうちは、作品に弾力は伴わない。

もともと、抽象は具象に始まっているはずで、具象はなおざりにした抽象に説得力を望んでもそれは無理である。具象といふ加減に馴れ合った抽象に胡坐をかいているところだところで仕返しをされる。抽象に逃げるな、と自分を叱りつけて小説を書いていると、日頃いかに物の見方が杜撰であるかがよく分る。見ているつもり、聞いているつもりでは小説は一行も進まない。小説を書く基礎になるのは、日常、事物を杜撰ではなく「見る」習慣、「見る」力だと知らされる。そこから事物の選択と再構成が始まる。

評論では抽象的、概念的な物言いが許されると言ったが、事物を杜撰ではなく「見る」習慣、「見る」力の必要については、小説の場合と全く同じだと考えている。個々の作品も山川草木と対等な事実であって、具象としての文章をいい加減にではなく「見る」力の必要は、読みの誤りから遠ざかる条件でもある。

評論へのシヨウ動にも小説へのシヨウ動にも、私の場合、その根には必ず感動がある。心の揺れがある。それが無い所ではどちらも成り立ちが難しい。ただ、小説を書き出してから、評論を書いていた自分がそれ以前よりもいくらかはつきり見えてきた。勿論その欠点を含めて。と同時に、テキストの読みの粗雑な評論、あるいは研究の類に、強い疑問を抱くようになった。読みには段階がある。そのほどにはほとんど限りが無い。それは、日常、自分の環境の事物を見る、その見方のほどに限りがないのと本質的には違っていかないと思う。自分のかつてのいくつかの評論がそうであったように、読みの粗雑な評論には説得力が伴わず、とかく声が高い。小説を書くことを知った私が自分の評論に求めるようになったのは、出来るだけ具体的な平明な言葉で、事物としての文章の **お** を行うこと。事物としてのテキストの読みが、文章に即して謙ウキヨであり、杜撰でさえなければ、具体的かつ平明な言葉での客観化は不可能ではないであろうし、説得力、普遍の力をもつ論述は可能のはずだということである。

テキストをよく見ていない抽象的な物言いを恐れること。テキストの **か** では、事物としての言葉遣いに対する認識のしかたそのものが問われるが、そこで大切なのは、繰り返しれば、文章に対応する謙キヨさと、もう一つ、ひらめきのような直観かもしれない。この二つは矛盾するようで実はそうではないのを私はようやく感じ始めている。

文章に対して、そこから何かを得ようとして読む場合と、さし当って小さな目的を持たず、文章から聞えてくるものだけに聞き入ろうとする場合とを較べてみると、小さくても発見に類するようなことは、無目的の場合のほうに起り易い。聞き入ろうとする自分の受け入れ態勢の如何によつて、仕込みの粗密によつて、聞えてくるものの種類、程度はおのずから異なるので、ただただ消極的に文章に対していけばよいということではない。

ほどこに<sup>(エ)</sup>応じた土ジヨウの耕しを怠らず、それでいて無目的の状態<sup>(エ)</sup>で文章に集中すれば、時折ひらめきのように頭を過ぎる何かに出会う。そうした現象はまさに到来としか言いようがないけれども、書き手にそういう時が実際に経験されているかどうかは、評論の文章そのものの弾みの違いになつて表われると思う。

ひらめきのように生じた何かを自分の言葉で所有し直し、具象の尊重から生まれたそのものを き し、更に一般化しては又具象に戻る作業を、<sup>(オ)</sup>辿々しくても繰り返していると、思いつきの抽象的な物言いが気持悪くなつてくる。怠りのない素描を重ねた上でそれを消している抽象画の分り易さと、素描を怠っている抽象画の分り難さをよく考える。抽象というのは多分人間らしい低級ならざる作業で<sup>(オ)</sup>ウトまれるべき行為ではない。ウトまれるべきは具象に根を下していない抽象であつて、無意識のうちにテキストを踏みにじっている恐ろしさについて、書き手が平然としてよいわけがない。抽象的な物言いの<sup>(カ)</sup>陥穽は、事物に対する目の怠慢を許し易いことかもしれない。

〔A〕一人の自分の中に背き合うものがある。何とか折り合いをつけたいの<sup>(カ)</sup>にどうしていいかが分らない。人には年齢に応じた悩みがいろいろあると思うけれども、小さい頃の私の真面目な悩みのうちにはそういうこともあつた。通つた小学校は校則が厳しかった。と言つてもそれは後になつて分つたことで、当時は比較できる他の小学校を知らないのだから、そういうものとして従うほかはなかつたが、沢山の規則を守るために、子供なりに緊張を促される時間は多かつた。欲望と自制。自然と不自然。自由と不自由。背き合うものを扱いかねながら、校則を守る快さだけでなく守らない快さも確かに感じ始めていた。病気で学校をよく休んだ。病気はいちどきに沢山の制限を運んでくる。世の中を暗く見せたり明るく見せたりする。

そんなことが次々に重なつて、これも後になつて知つた言葉で言えば、自分の中に理性と感性という相容れないものがある

ことを次第に強く意識するようになり、気味悪く思うようになつていった。私は読み書きは嫌いなほうではなかつたがいわゆる文学少女ではなかつた。書くのは文章よりも絵のほうに快さを感じていた。背き合うものを意識する機会は、成長するにつれて増える一方になつた。気味悪さは不安になつて沈んでゆく。この背き合いに折り合いをつけるのは、この不安を無くするのは人間の賢さではないだろうか。もつとも賢くならなければ。

超える、のではなく、消えるはずと考えた浅はかさをそうとも知らず、ろくに見えてもない世の中の端で呼吸しながら掻き続け、継りつく思いで辿り着いたのが波多野精一の著書『西洋哲学史要』であつた。世界の「本源」「原質」に目を眩つた私は女学生だつた。不安の解消を求めて辿り着いた場所は、しかし人智の頼もしさではなく、叡智の限りを思い知らせる場所でもあつた。すぐれた宇宙解釈、根源についての く は次々に否定され、説ごとの命は常に否定されるまでのものでしかない。不動のもの、不変のもの、絶対のものを求めて継りついた書物に、不動、不変、絶対の叡智は無いと知らされた人生初期の衝撃は、以後長く尾を曳くことになる。

今から思えば、安直に解決法を求めた当然の結果であるが、自分の内部での折り合いを求める心が、世界との折り合いを探る方向に延びてゆき、やがてその過程で、言葉で生きる人間のよろこびを知ることになる。人間、世界のすべてを受け容れる文学という器の大きさ。私自身のいかにも遅い文学への目覚めを、私はこの一冊の哲学史の恩恵なしでは語れない。時空をあのように見た叡智の歴史は、人間の目の歴史でもあろう。目に見えるものを見るだけでなく、目には見えないものを見るのも人間の大きな仕事である。目の怠慢がもたらす表現のなござりは、結局、この世界の部分として生きる人間の、生き方そのもののあらわれになる。

(竹西寛子「あはれ」から「ものあはれ」へ)より。ただし原文の一部を変更した)

注1 波多野精一は日本の哲学者。『西洋哲学史要』は一九〇一年刊行。古代ギリシヤから近世までの西洋哲学の歴史を概説している。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分にふさわしい漢字を含む文を、つぎの各群の1～5の中からそれぞれ一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

(ア) ショウ動

- 1 まだ時期しようそうである
- 2 減価しようきやく分を算出する
- 3 しようじように酌量の余地がある
- 4 敵対する力のかんしよう装置として役立つ
- 5 救助が進まずしようりよの色が濃い

(イ) ヨリ所

- 1 問題にたいしよする
- 2 きふ金を集める
- 3 資金をきよしゆつする
- 4 仕事をいらいする
- 5 しよむ課で働く

(ウ) 謙キヨ

- 1 いつこだにされない意見
- 2 こくうに消えていく
- 3 恩人のせいきよを悼む
- 4 しんきよに移り住む
- 5 きよどうが不審だ

(エ)

土ジヨウ

- 1 てんじよう無窮の広がり
- 2 じようりゆう水を飲む
- 3 日本酒のじようぞう所
- 4 土地をぶんじようする
- 5 寺院がじようざいを募る

(オ)

ウトまれる

- 1 提案をきよひされる
- 2 敵の侵攻をそしする
- 3 あなたのことをけいべつします
- 4 裁判のそじようを検討する
- 5 そがい感を覚える



問二 本文中の空欄

あ

く

には、1「分析帰納」、または2「分散拡大」のいずれかの語句が入る。それぞれに

入る適切な語句を選び、その番号を解答欄にマークせよ。

あ	1	分析帰納	2	分散拡大
い	1	分析帰納	2	分散拡大
う	1	分析帰納	2	分散拡大
え	1	分析帰納	2	分散拡大
お	1	分析帰納	2	分散拡大
か	1	分析帰納	2	分散拡大
き	1	分析帰納	2	分散拡大
く	1	分析帰納	2	分散拡大

問三 この文章において、筆者は「評論」と「小説」の異同をどのように考えているか。最も適切なものをつぎの1〜5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 評論は抽象的概念によって立てられた問いに導かれて書き進められ、小説は自分自身の内側から湧き上がる自然の欲求に従って書き進められるものであるが、目には見えないものを言い表そうとする点では根本的に同じである。

2 評論は自分がなぜその作品に感動したのかという問いに対して論理的に分析を行って答えを導き出すものであり、小説は具体的な事象に対する感覚に基づいて書かれるものであるが、絶対の真実に辿り着こうとする点では本質的に同じである。

3 評論も小説も問いから答えを導き出す作業であるという点に変わりはないが、評論においては答えが明示されるのに対して、小説ではあえて答えを書かず、具体的なものの記述によってそれが示唆される点で基本的に異質である。

4 評論は作品がもたらす感動の理由を概念的にとらえ論理的に説明しようとするものであり、小説は事物の具体的な表現の内に感動を広げていこうとするものであるが、事実を具象的なものとして「見る」ことに基づいている点では本質的に同じである。

5 評論も小説も感動を起点にして書き始められるという点に変わりはないが、評論は扱われる事実を抽象化し、概念的に論じていくものであり、小説は対象を「見る」ことに始まり、これを平明な文章で記述していくものであるから、両者は根本的に異質である。

#### 問四

筆者は、評論を書く際に、文章に相對する上で好ましい態度とはどのようなものだと考えているか。最も適切なものをつぎの1〜5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 まったくの無心の状態で、文章に書かれていることを忠実に読み取っていくことが望ましく、そのような受け身の姿勢の先にひらめきのような直観が生まれるものである。

2 文章からどれだけのものが得られるかは、読み手の側にそれを受け容れる態勢が整っているかどうかにかかっているので、準備を怠らず、テキストから聞こえてくる声を聞き逃さないように、積極的な姿勢で読むことが大切である。

3 思いつきの抽象的な思考からは新たな発見を得ることができないので、文章を読む上では、抽象的なものの言い方に惑わされないように、常に具体的な実例や現実を引き寄せ、平明な言葉遣いに置き換えて理解することが大切である。

4 文章からより多くのものを得るためには、読み手である自分の認識枠組みと書き手の認識枠組みとが対等な関係に立っていることが望ましく、両者の対話的なやりとりの中から直観的なひらめきが生まれるものである。

5 適度な準備を整えた上で文章に集中することが必要であるが、自分の側から読み取りのポイントを持ち込まず、テキストがもたらしてくれるものを待ち受ける姿勢を取ることが大切である。

問五 段落〔A〕において、筆者は子どもの頃の思い出を記している。この一節はなぜこの文章の中に挿入されているのか。その説明として最も適切なものをつぎの1〜5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 小学校の校則の不条理な厳しさに対して、子どもの頃に覚えた抵抗感が、その後の文学的活動の原点となっているから。

2 子どもの頃の体験を通じて自分の中に発見した「理性」と「感性」の二側面が、のちに「評論」と「小説」という二つの異質なジャンルで文学活動をする理由になっているから。

3 子どもの頃から、自分の中にたがいな背き合うものがあると感じており、これを何とか乗り越えようとする欲求が、やがて文学で生きていく道に通じることになったから。

4 子どもの頃は学校をよく休むほど病気がちで、生活上の様々な制約が生じていたが、文学や哲学に親しむようになったことで、病気から回復し、成長していくことができたから。

5 子どもの頃から、自分の中にたがいな背き合うものがあると感じていたが、この矛盾を言葉に表すことによるこびに目覚めたことが、文学の道に進む理由になったから。

問六 傍線部B「人智」とはどのような意味か。最も適切なものをつぎの1〜5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

1 様々な矛盾を乗り越えて、絶対的に確かな知識に辿り着くことのできる人間の知力

2 様々な矛盾に耐えて、現実世界を生き延びることのできる人間の生活力

3 具体的な事象を正確に見ることのできる人間の観察力

4 具体的な事象を見ることから始めて、これを論理的、抽象的に解明することのできる人間の理解力

5 不動、不変のものはないのだと見極めて、目に見える世界と折り合うことのできる人間の適応力

問七 本文の内容に合致するものをつぎの1〜7の中から二つを選び、それらの番号を解答欄にマークせよ。

- 1 筆者は評論から始めて小説の道へと進んだが、それは筆者の中に生まれつき備わっていた資質が、抽象的な分析ではなく具象的な記述の方に向いていたからである。
- 2 筆者は小説を書き始めたことよって、評論においても、論理的に読者を説得するのではなく、具体的な事実の記述を通じて、読者が自ら結論を導きだすことをうながすような文章を書けるようになった。
- 3 筆者は小説を書くようになってから、抽象的で概念的な文章についても、その基礎に、怠りなく事実を見ることがなされているかどうか、より厳しい判断を向けるようになった。
- 4 筆者は小説を書くようになってから、事物を正確に見ることを怠らなければ、世界を矛盾なく見通すことのできる叡智に辿り着くことができると考えるようになった。
- 5 筆者は自分の中にある矛盾を超越することを求めて哲学書を開いたが、その哲学書は絶対確実な知識を与えてくれなかったため、具象的に事実を見て表現する文学の道へと進んだ。
- 6 筆者は自分の中にあつた不安を解消するために哲学書に救いを求めたが、その哲学書は絶対に確かな知識はありえないことを教え、人間の認識にはとらえきれない世界を受け容れる営みとしての文学に、筆者を導くことになった。
- 7 筆者はある哲学書との出会いを通じて、人間の認識力の限界を知らされることとなり、それ以来、目には見えないものを見通して表現する営みとしての文学を志すようになった。